

道とアイヌ民族（の祖先）を指すようになったともいわれる。  
えん堤（えんてい・堰堤）：川の水や土砂（どしゃ）をせきとめるために、川の流れを横断してつくられた構築物のこと。（ p194）

## か

カール（Kar・ドイツ語）：氷河となる氷ができた、山頂近くにある半円形の谷地形のこと。圏谷（けんこく）ともいう。

櫂（かい）：水をかいて舟（ふね）や船を進める道具。

海溝（かいこう）：海底が細長くみぞのようになっているところで、深さ6kmより深いものをいう（浅いものはトラフ）。北海道の東南部には千島海溝（ちしまかいこう）があり、本州の東部には日本海溝がある。マリアナ海溝の最深部は1万m以上の深さがある。プレートがほかのプレートの下にすみこむところ。（ p23）

海進（かいしん）：地球が温暖になると、氷河（ひょうが）や氷床（ひょうしょう）など陸上にある氷がとけて、その水が海に流れこむ。すると海水が増え、海水面が高くなり、そのため陸地がせまくなる。海が内陸に進んでくることになるので、これを海進という。約6千年前（縄文時代〔じょうもんじだい〕前期）には氷期のあと最も暖かい気候となり、この時の海進を縄文海進（じょうもんかいしん）という。（ p84） 海退（かいたい）

海成層（かいせいそう）：海の底にたまったものでできた地層。長い間に地面がもり上がることで、今では丘（おか）や山になっていることもよくある。（ p33）

海退（かいたい）：地球が寒冷になると、地上に降った水分がこもりついて海に流れこむ水の量が減る。これによって海水面が低くなり、陸地が広がる。海岸線が海側へ後退するので、これを海退という。最近の氷期（約8万～1万年前）の時には、北海道はサハリンと、サハリンは大陸と陸続きになったため、北海道は大陸からのびる半島の先だった。（ p62） 海進（かいしん）

開拓（かいたく）：山野を切り開いて、田畑にすること。

開拓使（かいたくし）：北海道など北方の開拓のため、明治2年（1869）から明治15年（1882）まで置かれた役所。

開発（かいはつ）：土地や資源などを、暮らしや産業のある目的に合わせて利用しやすくすること。

外来種（がいらいしゅ）：おもに人間の活動によって持ちこまれた、もともとその地域にいなかった生き物。 在来種（ざいらいしゅ）

海嶺（かいらい）：海底山脈のこと。プレートが生まれ、分かれていくところで、地下からマグマがのぼってくる。（ p23）

鍵層（かぎそう）：広い範囲（はんい）にあり、ほかの地層と見分けが付きやすく、どちらかという短い期間でたまったため、はなれた場所にある地層の新旧を判断する基準となる地層のこと。火山灰（かざんばい）の地層は、鍵層によく使われる。（ p21）

火口（かこう）：火山活動によって、地下のマグマや火山ガスがふき出す場所。または、かつてマグマなどがふき出したことによってできた円形に近いくぼみ。多くの場合、直径約1km以下。

火砕流（かさいりゅう）：火山が爆発的（ばくはつてき）に噴火（ふんか）した時などに、くだけ散ったマグマ（火山灰や火山れき）が高温のガスと一体になって、重力によって流れ下るもの。数百 ととても熱く、時速数十km（100kmをこえる時）ととても速いので、おそわれたらまず助からないというおそろしい火山の活動。（ p336）

火山（かざん）：地下深くにあったマグマや火山ガスがふき出すところ。ふつうは地形的な高まりをいうが、爆発（ばくはつ）や陥没（かんぼつ：落ちくぼむこと）によってできた地形もふくめる。水中にもある。

火山岩（かざんがん）：火成岩（かせいがん）の中で、マグマが急に冷やされてできた岩石。多くが火山からふき出してできる。溶岩（ようがん）や凝灰岩（ぎょうかいがん）など。

火山灰（かざんばい）：火山からふき出したもので、マグマが粉々にくだけたもの。木や紙などが燃えてできる灰とはまったく異なる。地質学では直径2mm～1/64mmまでのものをいう（2～64mmのものは「火山れき」、64mm以上のものは「火山岩かい」）。また、工事や園芸などで利用するために凝灰岩（ぎょうかいがん）をけずり取ったものも、火山灰と呼ばれる。

火山れき（かざんれき・火山礫）：火山からふき出したマグマがくだけたもので、直径2～64mmのもの。2mm以下は「火山灰」、64mm以上は「火山岩かい」。

火成岩（かせいがん）：マグマが固まることでできた岩石。火山岩（かざんがん）と深成岩（しんせいがん）などに分かれる。ほかの岩石としては堆積岩（たいせきがん）と変成岩（へんせいがん）がある。

化石（かせき）：昔の生き物の体や生き物が残したあと。（ p21）

河川敷（かせんしき）：堤防（ていぼう）と堤防の間などで、ふだん水が流れていない平地のこと。正式には高水敷（こうすいしき）という。洪水（こうずい）の時に水が流れるところ。広い意味では、ふだん水が流れているところ（低水路）も河川敷にふくまれる。

河川法（かせんほう）：川をどのように管理し、どのように利用するかについて定めた法律。（ p205）

活火山（かつかざん・かつかざん）：おおむね過去1万年以内に噴火（ふんか）したことがわかっている火山と現在活発な噴気活動（ふんきかつどう：ガスがふき出すこと）のある火山（火山噴火予知連絡会・気象庁による定義）。

カムイ（アイヌ語）：「神」のこと。自然の生き物や自然現象を中心に、さまざまなカムイがいる。（ p134）

カムイチェブ（アイヌ語）：サケのこと。神の魚という意味。

カムイモシリ（アイヌ語）：カムイ（神）の国。これに対してアイヌ（人間）が生活する世界をアイヌモシリ（人間の国）という。自然の生き物や自然現象などは、カムイモシリからカムイが何かの目的をもってアイヌモシリにやってきたもの、もしくはやってきたことによって起きたことである。

軽石（かるいし）：火山からふき出したもので、穴がたくさんあいているかたまりのうち、明るい色をしたもの。黒っぽいものは「スコリア」という。マグマにとけていた水分などがガス化して穴をあけた。軽石の火山灰もある。ただ、一般的には細か

いものを軽石と呼ばず「軽石と火山灰」と分けることも多い。  
カルデラ：多くの場合輪かくがほぼ円形の、火山活動によってできた陥没地（かんぼつち：落ちこんだところ）のこと。火口より大きく、多くの場合直径約1km以上で、周囲が急なガケで取り囲まれていることが多い。

カルデラ湖（カルデラこ）：カルデラに水がたまってできた湖。洞爺湖（とうやこ）や摩周湖（ましゅうこ）、支笏湖（しこつこ）など。かつては三股盆地（みつまたぼんち：上士幌町）もカルデラ湖であったという。（ p36）

監獄（かんごく）：今の刑務所（けいむしょ）。（ p160）

間氷期（かんびょうき）：氷期と氷期の間の暖かい時期。

顔料（がんりょう）：ものに色をつける時に使う材料のうち、水や油にとけないもの。水性顔料（すいせいがんりょう）は水の中にとても細かい顔料が混ざっている状態のもので、とけているのではない。

### き

帰農（きのう）：農業をやめていた人や都会で農業をやっていた人が、農業をはじめること、また農業をするためにふるさとへ帰ったり、都会をはなれたりすること。（ p185）

凝灰岩（ぎょうかいがん）：火山からふき出した火山灰が地上や水中にたまり積もり固まってできた岩石。「タフ」ともいう。

恐竜（きょうりゅう）：中生代の陸上八虫類をいう。大きなものになると体長35m、体重75トンというものまでいた。約6,500万年前に絶滅した。

### く

空襲（くうしゅう）：飛行機やヘリコプターなどによる攻撃（こうげき）。（ p197）

くんせい（燻製）：保存性や風味を高めるため、魚や肉などをけむりでいぶしたもの。

### こ

交易（こうえき）：はなれたところに住む人と、ものの交かんや売買をおこなうこと。

洪水（こうずい）：川の水が大雨や雪解けによって、ふだんより流れが増えること。増水（ぞうすい）。水がふだんの流れからあふれ出る「はんらん」を指すこともある。

鉱物（こうぶつ）：水晶（すいしょう）や雲母（うんも）のように化学的成分が均一の結晶体（けっしょうたい）で、一定の性質をもつ無機質（むきしつ）の固体物質をいう。ちなみに岩石は、鉱物やくだけた岩石が集まってできたもの。

広葉樹（こうようじゅ）：カシワやモミジなどのように広く平たい葉をもつ樹木。

護岸（ごがん）：川岸を水の流れから守ること、または守る方法。（ p212）

国郡制（こくぐんせい）：明治2年（1869） 開拓使（かいたくし）が北海道を11国86郡に分けた制度。十勝地方は「十勝国（とかちのくに）」となり、7郡に分けられた。足寄郡（あしよるぐん）は釧路国（くしろのくに）に入れられた。郡名は、多少ズレはあるが、多くが今でも使われている。（ p156）

黒曜石（こくようせき）：ガラス質の火山岩（かざんがん）。

黒っぽいものが多く、割ると貝ガラのような鋭い断面（だんめん）になる。ねばり気が強く（二酸化ケイ素が多く）、水分

の多いマグマが急に冷やされてできるといわれる。石器の材料としてよく使われる。

古砂丘（こさきゅう）：大昔にできた砂丘（さきゅう）のこと。土におおわれたあとでも波をうった地形となっていることがある。十勝では約4万年前の支笏（しこつ）火山灰による古砂丘と約1万8千年前の恵庭（えにわ）火山灰による古砂丘がある。

小作（こさく）：広い土地を持つ地主から土地を借りて耕し、定められた小作料（おもに生産物）を地主にはらうこと。小作をする人を小作人（こさくにん）、小作者（こさくしゃ）、小作農（こさくのう）と呼ぶ。

コタン（アイヌ語）：集落のこと。

戸長役場（こちょうやくば）：役場といっても住民によって選ばれた市町村長や議員はなく、国から任命（にんめい）される戸長のもとで、地域の管理をおこなった。

骨角器（こっかくき）：動物の骨や角（つの）を利用して作られた道具。旧石器時代にも使われていたが、石器や土器とちがって分解され土にかえるため、古い時代のものはなかなか見つからない。

### さ

栽培漁業（さいばいぎょぎょう）：自然産卵（しぜんさんらん）の場合、卵から仔魚（しぎょ）になり、稚魚（ちぎょ）になるまでの間に多くの魚が死んでしまう。そこで、人の手で卵からふ化させ、稚魚（ちぎょ）になるまで育ててから時期を見て自然に放すと、少ない卵からでも多くの成魚が育つようにできる。このように途中（とちゅう）まで人の手で育てた上で魚をとることを栽培漁業という。養殖（ようしょく）のように成魚になるまで育てることをしない。サケなどでおこなわれている。

細胞（さいぼう）：生き物の体を形づくる基本的なもの。

在来種（ざいらいしゅ）：もともとその地域で生きていた生き物。外来種（がいらいしゅ）

砂丘（さきゅう）：砂漠（さばく）など砂が広がった場所で、風によってふき寄せられることでできた砂の丘（おか）。

札幌県（さっぽろけん）：明治15年（1882）開拓使（かいたくし）がなくなり、北海道には函館県（はこだてけん）・札幌県・根室県（ねむろけん）の3県が置かれることになった。翌年には農商務省北海道事業管理局が設置され、この時期を三県一局時代と呼ぶ。十勝はほとんどが札幌県に入り、足寄郡（あしよるぐん）は根室県に入った。（～明治18年〔1885〕）（ p156）

擦文（さつもん）：土器表面を木のへらで擦って（こすって）つけた文様（もんよう：もようのこと）。北海道で8世紀末から13世紀ころまで見られる土器を特ちょうづけ、この時代を擦文時代という。

産卵（さんらん）：卵を産むこと。

産卵床（さんらんしょう）：魚が卵を産むために水底などにつくるくぼみ。自然状態のサケでは、わき水のあるれき質の（小石の）川底をメスがほることでつくり、産卵後、石でおおわれる。ふ化した仔魚（しぎょ）はしばらくこの中で暮らし、稚魚（ちぎょ）にまで育ててエサを食べるようになると流れの中につき上がる。

### し

仔魚（しぎょ）：ふ化してから、すべてのヒレのスジの数が、成